

令和 3 年 5 月 7 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01688

研究課題名（和文）審判員に対するストレスマネジメントプログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of the stress management program of the referee in sport

研究代表者

村上 貴聡（MURAKAMI, KISO）

東京理科大学・理学部第一部教養学科・教授

研究者番号：30363344

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、スポーツ審判員のストレス要因（ストレッサー）の内容を具体化し、ストレス反応との関連を検討した。さらに、審判員がストレス反応を軽減するために行っているストレス対処法を明らかにすることも目的とした。その結果、審判員のストレッサーとして、「他者からの期待・プレッシャー」や「選手やコーチからの抗議」などが抽出され、それらがメンタルヘルスにネガティブな影響を及ぼしていることが明らかにされた。また、テニス審判においては問題中心型コーピングよりも、情動焦点型コーピングを活用しながら適切にストレスを対処していることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

審判員におけるストレスの実態やその対処方略を検討した研究は我が国ではほとんどみられず、その結果としてのストレス尺度の開発、またストレス反応への影響についても明らかにしたことは、学術的意義として高いものである。さらには、本研究から提示された報告は審判員におけるメンタルトレーニング研究を進展させ、ひいては育成に貢献できることを考えると、社会的意義も十分あると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to determine the stressors of sports referees and examine the relationship between these factors and the stress response. In addition, it aimed to determine the stress coping mechanisms that referees adopt in order to reduce their stress response. The results showed that factors such as “expectations or pressure from others” and “objections from players and coaches” were stressors for referees, and that these factors had a negative impact on their mental health. They also showed that tennis referees deal with stress appropriately, using a more emotion-focused coping mechanism rather than a problem-centered one.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：審判員 ストレッサー ストレス対処 コーピング

1. 研究開始当初の背景

近年、オリンピックや国際大会では誤審や判定が覆るなど、審判に関する問題が数多く取り上げられている。審判員の役割は試合において実際に生起する様々な事象をルールに基づいてコントロールすることであり、うまくやっても当然、少しのミスも許されないため(小川、2001)、常にストレスフルな状況に置かれている。そのため国際審判員においてもストレスマネジメントの必要性が指摘されている(日本サッカー協会、2002)。例えば、Fry & Soften (1992)の研究では、サッカー及びバレーボールの審判員の20%が、自分自身あるいは家族への過度な批判を経験したことから、審判活動を辞めたことを明らかにしている。また、バスケットボール国際審判員の45%が、ストレスのために頭痛や筋痙攣、血圧上昇などの兆候がみられたとする報告(Anshel & Weinberg, 1995)もある。このようなストレス反応の多くは正しい判定を行う上でマイナスに作用すると考えられるが、審判員のストレス対策に着目した研究は我が国ではこれまで行われてこなかった。とりわけトップレフェリーともなればオリンピックやワールドカップなど世界中から注目される大会で審判をしなければならない。そのようなプレッシャーのかかった状況の中で審判員はストレス問題を予防し、解決する必要がある。

現在までのストレス研究においては、Lazarus & Folkman (1984) が提唱したトランスアクションモデルが多く援用されてきた。トランスアクションモデルはストレス過程を説明するモデルであり、ストレスの原因(ストレッサー)、ストレッサーに対する個人の意味づけ(認知的評価)、ストレス対処(コーピング)、ストレス反応という一連のプロセスを示している。スポーツ場面においても、この理論は認知的・身体的不安の軽減や競技成績の向上を目指す認知的操作とその過程を検討するための理論的枠組みとして用いられている。つまり、審判員のストレス状況の解釈や実践教育につなげるためには、ストレス過程をモデル化すること、ならびに審判行動との関連性を調べるのが鍵となる。

また、ストレスならびにストレス反応は、ストレス過程の解釈を試み、ストレスマネジメントなどの対処的・予防的介入方法を探る上での基本的な指標であるといえる。しかしながら、スポーツ場面におけるストレス研究は審判員を想定して提言されたものではなく、審判員特有のストレッサーならびにストレス反応を適切に評価するには限界があり、日常・審判場面に関連するストレス過程を体系的に理解することには不安が残る。したがって、審判員のストレッサーおよびストレス反応を明らかにすることによって、審判員の心理サポートの発展に有益ではないかと感じたことが本研究の背景にある。

2. 研究の目的

本研究では、審判活動に影響を及ぼす要因として審判員の心理的ストレスに注目し、審判員のストレスの実態とその効果的対処を理論的・実践的に検討することを通して、スポーツ審判員を対象としたストレスマネジメントプログラムを考案することを目的とした。この目的を達成するために、以下の具体的な研究を遂行した。

- 1) 面接調査、質問紙調査を実施することにより、審判員のストレッサーの実態を明らかにする。
- 2) 審判員の心理的ストレスを測定する評価尺度を開発する。
- 3) 審判員の心理的ストレスとストレス反応との関連性を検討する。
- 4) 審判員のストレスマネジメントプログラムを考案する。

3. 研究の方法

1) テニス国際審判員を対象としたストレッサーおよびコーピングの実態調査

対象者は、国内外で活躍するテニス国際審判員5名(男性3名、女性2名;平均年齢50.6歳)であった。対象者はITF(国際テニス連盟)、ATP、WTAの基準に従い認定された審判資格を有していた。

インタビューガイドラインを事前に作成するという半構造化面接法を用いて、ストレッサーおよびその対処法に関してインタビューを行った。対象者には承諾を得た上で約40分のインタビューを1対1で行った。インタビューに際して作成したガイドにおいて、使用した調査項目は「審判活動を行う上で体験している悩みごとや負担であると感じる出来事(ストレッサー)をいくつかもお答え下さい。また、そのストレッサーにどのように対応・対処していますか?」という質問を軸に回答を求めた。インタビューの内容は録音した後に逐語化し、ストレッサーおよびコーピングに関連すると思われる文章や成句を逐語録の中から抽出し、適切かつ簡潔な言葉でコード化して類似する項目を類型化した。

インタビューによる回答内容の整理・集約は、スポーツ心理学の専門家2名およびストレス研究の専門家1名の分析者により行われた。まず、2名の分析者により、報告された心理的スキルについて内容分析を行った。続いて、2名の分析者によって得られた結果を残りの1名の分析者によって再度吟味した。

2) 国際審判員を対象としたストレスの実態調査

対象者は国内外で活躍する公認審判員5名（男性4名、女性1名；平均年齢40歳±4.0歳）とし、集団種目の競技であった。審判の平均経験年数は20.2±4.4年であり、いずれも各競技団体における最上級の審判資格を所持していた。また、競技種目によって新たなストレスが抽出される可能性もあるため、本研究では複数種目の審判員を対象とした。

調査方法ならびに分析方法については、3.1)で記載した手順と同様である。なお、対象者には研究目的を伝えた上で、インタビューでの発言によって個人が特定されないように配慮すること、ならびに研究データとしてインタビュー内容をICレコーダーに録音することを説明し、同意を得た。

3) スポーツ審判員におけるストレス尺度の作成

調査対象者は各競技団体（サッカー、テニス、野球、格闘技系など）における審判資格を有する258名（平均年齢45.9歳）であり、審判の経験年数は平均17.4年であった。調査は、自己評定による質問紙法を用い、調査用紙を各審判員に手渡し、各自で記入したものを回収した。

調査内容は、3.1)および2)で得られた知見を参考に、ストレスとして審判員に想定される「選手や指導者との関係」「他の審判員との関係」「ジャッジパフォーマンスに関する問題」「環境（時間的負担や金銭的負担）」「プレッシャー」の5領域に関連する30項目とした。設定された項目は、スポーツ心理学専攻の教員及び審判員との話し合いにより、最終的に内容が重複しないように配慮して、質問表を作成した。回答方法は対象者がすべての項目に対して、その出来事の1年間の経験頻度「0：全然なかった」と嫌悪度「1：全然嫌でなかった」～「4：非常に嫌であった」を評定するものであった。また、分析は探索的因子分析を行い、スポーツ審判員のストレスの内容の構造を確認した。

4) 審判員のストレスがメンタルヘルスに及ぼす影響

対象者は、3.3)の調査対象者と同様である。調査内容については、3.3)で作成された審判員のストレスを測定する尺度とメンタルヘルス尺度を用いた。審判員用ストレス尺度は22項目5因子（期待・プレッシャー、選手・コーチからの抗議、審判間のコミュニケーション不足、判定への後悔、時間的負担）で構成されていた。一方、メンタルヘルス尺度に関して、従来の心理的ストレス研究の中で扱われてきたストレスに対する反応としてのストレス反応を取り上げた。そのため、スポーツ選手用ストレス反応尺度（煙山ほか、2013）を審判員用に改変して用いた。この尺度は「身体的疲労感」、「無気力感」、「不機嫌・怒り」、「対人不信感」、「抑うつ」の5因子15項目で構成され、ストレス反応の3つの側面を捉えることが可能である。回答は「全くなかった(1)」～「とても多くあった(5)」の5件法で求めた。

調査用紙は各競技団体が主催する審判講習会で配布され、それぞれ一斉に集団実施された。また、用紙は記入後、その場で回収された。調査用紙そのものは無記名方式で実施され、回答者一人ひとりには謝礼として図書カード（500円分）が贈られた。なお、本調査における全ての分析は、統計ソフトのSPSS25.0Jを用いて行った。

5) 審判員のストレスマネジメントプログラムの考案

審判員に対して行われた調査結果から、審判員用のストレスマネジメントプログラムを考案し、目標設定や感情のコントロール法について本研究代表者および研究分担者で議論した。

4. 研究成果

1) テニス国際審判員を対象としたストレスおよびコーピングの実態調査

ストレスに関しては、内容の類似性により細かく分類し、サブカテゴリーをつくった。さらにサブカテゴリーで類似するものを組み合わせ、最終的に9つのカテゴリーに類型化した。類型化された内容としては、「選手への対応」、「プレッシャー」、「時間的負担」、「金銭的負担」、「ジャッジパフォーマンス」、「審判間・競技団体との関係性」、「遠征・移動」、「試合環境」、そして「目標の喪失」であった。

一方、コーピングについては最終的に7つのカテゴリーに分類した。類型化された内容としては、「認知的対処」、「気晴らし」、「認知的回避」、「行動的回避」、「事前的対処」、「心理技法の活用」、そして「コミュニケーション」であった。特に、「認知的対処」「気晴らし」「認知的回避」「行動的回避」が多かった。つまり、ストレスに対して、積極的に問題を解決するよりも、その問題の生起によって害される自らの気持ちを安定させるほうに重きをおいて、ストレスに対処しているということになる。問題を解決するには、それなりの時間とエネルギーが必要になるが、うまく気分転換ができれば、ストレスによって害された気分を、一時的であるかもしれないが、少ないエネルギーで緩和することができるという点で、このような方略が多くなったのではないかと考えられる。本研究の結果、テニス国際審判員のコーピングストラテジーについては、積極的に問題を解決していこうとする能力よりも、物事を良い方向に考え、気晴らしをしながら、適切にストレスを回避する能力が、審判活動を送る上で有効であることが示唆された。本研究の結果は、国際審判員特有のものであり、この結果をすべて

の審判員に当てはめることはできない。したがって、この結果を参考にして、国内大会でも審判を務める審判員にも調査を行い、テニス審判員のストレスとコーピングの特徴を明らかにしていく必要がある。

2) 国際審判員を対象としたストレスの実態調査

複数種目における国際審判員のストレスに関連する回答は述べ 61 件が得られた。内容分析により分類化を行ったところ、7 カテゴリーが抽出された。まず、自分のパフォーマンスに対する不安や責任感、そして試合に対する緊張感など「判定への不安」に関する内容が示された。続いて、審判員間の人間関係や競技団体の関係者とのやりとりといった「審判活動における対人関係」に関する内容が国際審判員のストレスサーとして挙げられた。次に、自分のパフォーマンスをアセッサから評価されるといった「パフォーマンスの評価」に関する内容もみられた。特に、資格を保持するため、あるいはコート外での振る舞いや態度も評価されることから、多くの審判からストレスサーとして報告された。

さらに、ジャッジパフォーマンスに関する内容もストレスサーとして挙げられた。審判員は心理的な側面だけでなく、体力的な側面もストレスを感じていることが明らかにされた。

選手やチームからのクレームや観客からのブーイングなど「選手、チーム、観客からの抗議」もストレスサーとして指摘された。一方で、本務への影響や家族との時間を失うといった「時間的負担」も多く、多くの審判員からストレスサーとして挙げられた。そして、間違っただけを発信したりする、常にみられている「メディアに関すること」も示された。以上のように、国際審判員の審判活動におけるストレスサーについて整理・集約した。その結果、国際審判員は多様なストレスサーを経験していることが明らかにされた。

3) スポーツ審判員におけるストレスサー尺度の作成

審判員のストレスサー尺度の構造を明らかにするために、探索的因子分析を行った結果、5 因子 22 項目が抽出された (表 1)。

また、それぞれの下位尺度の信頼性係数 (Cronbach) は、十分な値 (第一因子: $\alpha = .78$ 、第二因子: $\alpha = .87$ 、第三因子: $\alpha = .85$ 、第四因子: $\alpha = .79$ 、第五因子: $\alpha = .80$) を示した。第一因子には合計 6 項目が含まれ、「周囲や期待からプレッシャーを感じたこと」「注目される試合の審判を任されること」など、他者からのプレッシャーや期待に関する内容なので、「他者からの期待・プレッシャー」と命名した。第 2 因子にも 6 項目が含まれ、「選手・コーチから抗議を受けること」「選手やコーチの言い方が威圧的なこと」などの内容だったので、「選手やコーチからの抗議」と命名した。続いて、第 3 因子には 4 項目が含まれ、審判員間の意思疎通や協力に関する内容だったので、「審判間のコミュニケーション不足」と命名した。第 4 因子には 3 項目が含まれ、判断ミスをする事や納得のいく判定ができなかったなど、判定に対する後悔に関する内容だったため、「判定への後悔」と命名した。最後に、第 5 因子は日常生活と審判活動の時間的な問題に関する内容だったため、「時間的負担」と命名した。また、抽出された項目の経験率をみても、誰もが多く経験している項目であり、ある特定の審判員のみが経験しているストレスサーではないことが示された。

これらの結果から、尺度の妥当性が認められ、尺度の信頼性が確認された。これまでに審判員のストレスを測定する尺度は我が国では皆無であった。この点、本研究で開発されたスポーツ審判員用ストレスサー尺度は、審判員特有の心理的ストレスを測定することが可能であり、審判員のストレスマネジメントプログラムの実施効果を検討するためのアセスメントツールとして有用であると考えられる。

表 1 審判員用ストレスサー尺度因子分析の結果

| 各因子における項目の内容 | 因子 負荷量 | 経験率 (%) |
|-------------------------------------|-----------|------------|
| F1 他者からの期待・プレッシャー (6項目) | | |
| ss15 スーパーバイザーや競技団体から適切な評価を受けないこと | .80 | 37.6 |
| ss24 周囲や期待からプレッシャーを感じたこと | .68 | 66.3 |
| ss16 判断への理解が得られないこと | .63 | 60.1 |
| ss10 注目される試合(あるいは注目される選手)の審判を任されること | .62 | 70.9 |
| ss13 ゲームコントロールができないこと | .58 | 72.9 |
| ss5 メディアやweb上で批判されること | .40 | 32.2 |
| F2 選手やコーチからの抗議 (6項目) | | |
| ss1 選手から抗議を受けること | .87 | 76.4 |
| ss22 コーチやスタッフから抗議を受けること | .79 | 67.4 |
| ss21 選手同士がもめること | .68 | 57.4 |
| ss26 選手やコーチ(スタッフ)の言い方が威圧的なこと | .64 | 68.2 |
| ss20 観客やスタンドからブーイングを受けること | .58 | 48.4 |
| ss11 選手が自分たちの判断を受け入れてくれないこと | .50 | 66.3 |
| F3 審判間のコミュニケーション不足 (4項目) | | |
| ss2 審判員間で意思の疎通がはかれないこと | .91 | 72.1 |
| ss7 審判員間でコミュニケーションがとれていないこと | .87 | 65.1 |
| ss17 審判員間での協力が得られないこと | .67 | 51.6 |
| ss12 他の審判員と判定に関する意見が食い違うこと | .55 | 68.6 |
| F4 判定への後悔 (3項目) | | |
| ss3 試合の時、判断ミスをする事 | .82 | 95.0 |
| ss8 自分が下した判定に後悔すること | .82 | 90.7 |
| ss27 自分で納得のいく判定ができなかったこと | .66 | 85.7 |
| F5 時間的負担 (3項目) | | |
| ss4 家族と過ごす時間が持てないこと | .87 | 72.5 |
| ss19 休日が少ないこと | .83 | 59.3 |
| ss9 本務(仕事)との時間的なバランスがとれないこと | .72 | 64.0 |

4) 審判員のストレッサーがメンタルヘルスに及ぼす影響

審判員のストレッサーがストレス反応の規定要因となり得るかを検討するために、ストレス反応 5 因子を従属変数、審判員のストレッサー尺度の 5 つの因子を独立変数とする重回帰分析を行った。結果は表 2 のとおりであり、重回帰係数はストレス反応の各因子において有意な値を示した。重決定係数の値から、審判員のストレッサーの各因子の分散の約 11-19%を説明していることがわかった。また、標準偏回帰係数の値から各ストレッサー反応別にストレッサーが及ぼす影響をみてみると、「身体的疲労感」には時間的負担が、「無気力感」には「選手・コーチからの抗議」及び「時間的負担」が影響を与える結果が示された。また、「不機嫌・怒り」には、「選手・コーチからの抗議」、「審判間のコミュニケーション不足」、「時間的負担」が影響を及ぼしていた。そして「対人不信感」、「抑うつ」には、「選手・コーチからの抗議」及び「時間的負担」と関連している傾向が認められた。つまり、審判員はある特定のストレッサーを高く評価すると、ある特定のストレス反応を強く表出することが示された。一方、審判員のストレッサーである「期待・プレッシャー」及び「判定への後悔」は、経験率が高いにも関わらず、ストレス反応への影響がほとんどみられなかった。この理由としては、本研究で対象にした審判員の資格レベルが影響していると考えられる。すなわち、注目される試合を担当する審判員から、ボランティアで活動を行っている審判員までの全てを含んでいる。そのためストレス反応に大きな影響を及ぼさなかったと考えられる。最後に、本研究におけるストレッサーの説明力は約 11-19%であり、残差の分散は他の要因の影響によるものと考えられる。特に、先行研究では、認知的評価やコーピングがストレス反応の表出を直接規定する要因と考えられており、今後はこれらの要因を考慮に入れて検討していく必要がある。

表 2 重回帰分析の結果

| | ストレス反応尺度 | | | | |
|-----------------|----------|----------|----------|----------|----------|
| | 身体的疲労感 | 無気力感 | 不機嫌・怒り | 対人不信感 | 抑うつ |
| 審判員のストレッサー尺度 | | | | | |
| 期待・プレッシャー | -0.14 ns | 0.04 ns | -0.09 ns | -0.14 ns | -0.08 ns |
| 選手やコーチからの抗議 | 0.07 ns | 0.19 * | 0.23 ** | 0.27 ** | 0.22 ** |
| 審判間のコミュニケーション不足 | 0.13 ns | -0.03 ns | 0.21 * | 0.14 ns | -0.01 ns |
| 判定への後悔 | 0.05 ns | -0.04 ns | -0.13 ns | -0.06 ns | 0.08 ns |
| 時間的負担 | 0.33 *** | 0.22 ** | 0.17 * | 0.18 * | 0.16 * |
| Adjusted R^2 | 0.13 *** | 0.12 *** | 0.19 *** | 0.12 *** | 0.11 *** |

Note：従属変数：ストレス反応、独立変数：ストレッサー

数値は標準偏回帰係数 (β) と調整済み決定係数 (Adjusted R^2) を示す。

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

5) 審判員のストレスマネジメントプログラムの考案

審判員のストレスマネジメントプログラムの開発に向けて、研究者間で議論を行った。その結果、目標設定、感情のコントロール、コミュニケーションスキル、日常生活の管理などが審判のストレス対処に重要な内容であることを確認した。なお、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、プログラムの実践までは至らなかった。

今後は、本研究で得られた知見を参考にして、スポーツ審判員のストレスマネジメントプログラムを現場に提供することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Murakami, K., Sakata, S., Matsuura, M | 4. 巻 6 |
| 2. 論文標題 A qualitative examination of coping strategies in international tennis umpires: Pilot study | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 Science and Racket Sports | 6. 最初と最後の頁 91-97 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 平田大輔・柴原健太郎・佐藤周平・村上貴聡・伊藤雅充・佐藤雅幸・西條修光 | 4. 巻 26 |
| 2. 論文標題 大学女子テニス選手のアンフォースドエラーの原因の因子構造とその因果関係 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 テニスの科学 | 6. 最初と最後の頁 1-12 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 松浦真澄・村上貴聡 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 大学生のセルフケア技法としてのThought Field Therapy(TFT)およびEmotional Freedom Technique(EFT) | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 東京理科大学紀要（教養編） | 6. 最初と最後の頁 117-132 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 村上貴聡・阪田俊輔・平田大輔 | 4. 巻 27 |
| 2. 論文標題 質的研究法を用いたテニス国際審判員におけるストレスの検討 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 テニスの科学 | 6. 最初と最後の頁 1-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 村上貴聡・平田大輔・村上雅彦・宇土昌志・山崎将幸 | 4. 巻 9 |
| 2. 論文標題 スポーツ審判員に求められる心理的スキルの評価 ―尺度の開発とその活用― | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 東京体育学研究 | 6. 最初と最後の頁 1-8 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 Daisuke Hirata, Shuhei Sato, Kiso Murakami | 4. 巻 71 |
| 2. 論文標題 An examination of the factorial structure of the unforced-error measure in collegiate women tennis players in Japan: a comparison between players and coaches | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 COACHING & SPORT SCIENCE REVIEW | 6. 最初と最後の頁 8-10 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 平田大輔・佐藤周平・村上貴聡・佐藤雅幸・西條修光 | 4. 巻 25 |
| 2. 論文標題 大学女子テニス選手におけるアンフォースドエラーの原因に関する探索的検討 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 テニスの科学 | 6. 最初と最後の頁 17-28 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計14件(うち招待講演 0件/うち国際学会 7件)

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 村上貴聡・立谷泰久 |
| 2. 発表標題 審判員におけるストレスがメンタルヘルスに及ぼす影響 |
| 3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第47回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Murakami, K. |
| 2. 発表標題 A Qualitative Examination of Coping Strategies in International Referees |
| 3. 学会等名 SASMA & BRICS International Sport Congress 2019 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 村上貴聡・立谷泰久 |
| 2. 発表標題 審判インストラクターにおけるストレスとコーピング |
| 3. 学会等名 日本体育学会第70回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Murakami, K., Matsuura, M. |
| 2. 発表標題 Mental Health Assessment of Japanese Football Referees |
| 3. 学会等名 24rd annual Congress of the European College of Sport Science (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 平田大輔・柴原健太郎・出井章雅・佐藤周平・村上貴聡・佐藤雅幸 |
| 2. 発表標題 大学体育におけるテニス受講生のエラーの原因の因子構造について |
| 3. 学会等名 第31回日本テニス学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 K. murakami, S. Sakata, M, Matsuura |
| 2. 発表標題 A Qualitative Examination of Coping Strategies in International Tennis Umpires |
| 3. 学会等名 6th World Congress of Racket Sport Science (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 村上貴聡・阪田俊輔・松浦真澄 |
| 2. 発表標題 テニス国際審判員におけるコーピングストラテジーの検討 |
| 3. 学会等名 日本テニス学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 平田大輔・柴原健太郎・佐藤周平・村上貴聡・森井大治・佐藤雅幸 |
| 2. 発表標題 大学テニス選手のアンフォースドエラーの原因に関する研究:種目別・対戦相手の評価について |
| 3. 学会等名 日本テニス学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Murakami, K., Sakata, S., Matsuura, M. |
| 2. 発表標題 A Qualitative Examination of Sources of Stress in International Tennis Umpires |
| 3. 学会等名 23rd annual Congress of the European College of Sport Science (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Murakami, K., Tachiya, Y. |
| 2. 発表標題 A Qualitative Examination of Sources of Stress in International Referees of Soccer, Basketball, and Handball |
| 3. 学会等名 Association for Applied Sport Psychology 33th Annual Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hirata, D., Shibahara, K., Sato, S., Murakami, K., Morii, D., Kiuchi, M., Sato, M. |
| 2. 発表標題 Examination of Causes of Unforced-errors in Australian Tennis Players and Coaches |
| 3. 学会等名 Asian-Pacific Conference on Coaching Science 2018 (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 村上貴聡・平田大輔・阪田俊輔 |
| 2. 発表標題 テニス国際審判員におけるストレスの検討 |
| 3. 学会等名 第29回日本テニス学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Kiso Murakami, Masashi Uto |
| 2. 発表標題 Mental Skills Assessment of Japanese Handball Referees |
| 3. 学会等名 22th annual Congress of the European College of Sport Science in a MetropolisRuhr 2017 (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 村上貴聡・宇土昌志・阪田俊輔・立谷泰久 |
| 2. 発表標題 国際審判員を対象とした審判活動におけるストレスの検討 |
| 3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 村上貴聡 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 実業之日本社 | 5. 総ページ数 224 |
| 3. 書名 スポーツ審判メンタル強化メソッド | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|---|----|
| 研究 分担者 | 立谷 泰久 (TACHIYA YASUHISA) (10392705) | 独立行政法人日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター・スポーツメディカルセンター・前任研究員 (82632) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|--|---------------------------------------|----|
| 連携 研究者 | 松浦 真澄 (MATSUURA MASUMI) (00714411) | 東京理科大学・教養教育研究院・准教授 (32660) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|